〈機獣少女〉となるための絶対条件――それは機獣のコアの欠片を納めたＭＢデバイスとの契約である。

契約は〈想刻の間〉と呼ばれる仮想空間にて行われ、その際、契約者はＭＢデバイスの過去――つまりは機獣だった頃の記憶を幻視する。そのほとんどは通常空間に復帰した際に忘れてしまうが、極稀に、ほぼ完全な状態で記憶している者もいるという。

〈ビィエル〉の契約者――アイナ・ボーグマン。

〈ジービー〉の契約者――ルイゼ・ルンシュテッド。

共に二つ名を持つ優秀な〈機獣少女〉であり、専門家の間では、仮想空間で幻視したＭＢデバイスの過去の記憶を覚えている事が、二人の優秀さの秘密ではないかと言われているが、未だ仮説の域を出ていない。

ともあれ、彼女等は愛機の過去を――機獣だった頃の記憶を視て、覚えている。

誰の記憶にも、記録にすら残っていない光景を。

人間と機獣が、この星でもっとも輝いていた時代を。

それは遠い昔。まだ惑星ゼヘナで、機獣が兵器として人間と共に在った頃。

後に〈西方大陸エウロペ戦争〉と呼ばれる戦争があった。

それは当時の二大国家の戦争であると同時に、とある古代技術の開発競争でもあった。

〈オーガノイド・システム〉。

機獣の戦闘力を高める技術であり、失われた種の再生や、個体の成長・進化を促進させる事すら可能とした禁忌のシステム。それに目を付けた両国家は、戦争中であるにも関わらず、同技術の解明に戦力を割き、西方大陸の戦略的には何の価値もないはずの遺跡を調査して回り、時には鉢合わせた両国の部隊が成果を奪い合う事も多々あったという。

それだけの価値――いっそ威力と呼んで差し支えないだけの戦果を〈オーガノイド・システム〉はもたらした。

同時に――悲劇も。

技術の解析が進めば、それだけ破壊の規模も大きくなる。大きな力は人間を歪め、共に在るはずの機獣の心まで歪めてしまった。歪みは更なる歪みを呼び、やがて最悪の結果を招いてしまう。

目覚めさせてはいけない古代の機獣の復活。

それは人間の制御を離れ、人間だけでなく機獣にも牙を剥いた。

人間を見限り、同族を糧とし、圧倒的な力を以て、この星の支配者となろうとした。

それが必要な事だと信じて。

他のすべてを滅ぼす事になったとしても。

しかし、世界には大きな力が存在する。
均衡（バランス）が崩れれば、調和をもたらそうとする。

そんな力に導かれたように、滅びに抗（あらが）った者達がいた。
きっと彼等自身は否定するだろう。
蹠（もが）き、足掻（あが）く事こそ、生命の本質。
どれだけみっともなくても、最期の瞬間まで生きようとするのが生物。
彼等はただ、そういった本能とも呼べる衝動に従っただけなのだから。

これはこの星が『惑星Ｚｉ（ズィー）』と呼ばれ、機獣が『ゾイド』と呼ばれていた頃の物語。
〈西方大陸エウロペ戦争〉の最終局面において、戦局とはなんら関わりのない、誰にも知られる事のなかった戦いの記憶である。

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

閑話

『獣王 VS 魔装竜 VS 凶戦士（前編）』

蒼い機獣が力強い足取りで地を駆ける。

王者の風格を漂わせる雄々しいその姿は、まさに〈獣王〉と呼ぶに相応しい。

ＲＺ－０２８〈ブレードライガー〉。

ライオン型に分類されるその機体はヘリック共和国の新世代型ゾイド。此処、西方大陸での戦争の発端とも言える〈オーガノイド・システム〉を搭載した最新鋭機である。

その頭部には、高速ゾイドのスペシャリストである事を示す〈レオマスター〉の紋章がペイントされていた。赤い色の紋章が意味するのは、搭乗者が〈クレイジー・アーサー〉であるという事。

〈クレイジー・アーサー〉。

本名はアーサー・ボーグマン。

初老とも言える年齢だが、その容貌は老いてなお壮健といったところか。弱々しさや枯れた印象とは無縁な、共和国の老エースパイロットである。将軍の地位に就いていてもおかしくはない経歴の持ち主でありながら、ゾイド乗りである事にこだわり続けた彼を、周囲は親しみを込めて〈クレイジー・アーサー〉と呼んだ。

「――ぅおおおッ！」

敵機の射撃を躱し、時にＥシールドで防ぎ、間合いに跳び込めばレーザー・ブレードで即座に斬りかかる。速さと膂力を兼ね備えたライオン型だからこそ出来る高速近接戦闘。それを極めた者こそが〈レオマスター〉。

アーサー以上に〈ブレードライガー〉の乗り手に相応しいゾイド乗りは、大陸全土でも五人といないだろう。

だが、敵機――〈ジェノブレイカー〉は、自分の間合いではないと悟ると瞬時に回避行動に移る。逃がすまいとアーサーは、〈ブレードライガー〉に新たに装備された複合兵装『アタック・ブースター』を展開し、高密度ビームを撃ち込むが、それすらも左右に装備されたシールドに防がれてしまう。

（良い腕だ……）

アーサーは内心で敵パイロットを称賛した。

〈ジェノブレイカー〉の搭乗者はかなりの手練れだ。高い操縦技術と状況判断能力を併せ持っている。それは先の遭遇戦――ガリル遺跡で初めて相見えた際にも感じた。

そして、この再会を通じて新たに感じた事がある――『彼』はまだ若い。

それは〈ジェノブレイカー〉の動きで判る。荒く、まだ無駄が多い。アーサーのような熟練でなければ気付かない程度のものだが、そのわずかな差が実戦では明暗を分ける。

だがそれは、伸びしろがあるという事だ。すでに限界が見えてしまっているアーサーと

違い、無限の可能性を秘めているという事だ。それを羨ましくも思う。

（どんな奴だろうな……）

〈ジェノブレイカー〉のパイロットと会って話がしてみたい。

生き延びれば、きっと『最高のゾイド乗り』になれるだろう。

（おかしなもんだ。奴が生き延びるって事は、俺が死ぬって事なのにな）

自嘲気味に笑うと、アーサーはフット・ペダルを思いきり踏み込んで、〈ブレードライガー〉の背部に装備されたロケット・ブースターを全開にした。

死ぬつもりはない。生きていれば、まだ多くのゾイドに出会えるだろう。

だから――

「負ける訳にはいかん！」

蒼い〈獣王〉はアーサーの想いに応えるように雄々しく咆哮を上げると、金色のレーザー・ブレードを煌めかせ、〈ジェノブレイカー〉に突撃した。

●
●
●

「そうか、貴様も強化されたか――」

〈ブレードライガー〉を倒すべく生まれ変わった愛機――〈ジェノブレイカー〉のコクピットで、リッツは宿敵の攻撃を捌きつつ、万感の思いで独りごちた。

リッツ・ルンシュテッド。

まだ二十代前半であろう青年は、元はガイロス帝国のテストパイロットだった。クールかつゾイドの性能を充分に引き出すその操縦技術は〈アイスマン〉の二つ名で呼ばれたが、今の彼は宿敵に再び相見えた事に歓喜していた。

前回の遭遇戦で遅れをとって以来、リッツは赤い紋章の〈ブレードライガー〉の事が頭から離れなかった。奴に勝ちたい。そのために史上初の〈オーガノイド・システム〉搭載ゾイド――愛機である〈ジェノザウラー〉は生まれ変わったのだ。

ティラノサウルス型の外見はそのままに、各種装備を追加され、真紅のカラーリングを施された機体はＥＺ－０３４〈ジェノブレイカー〉と名付けられた。

全ての性能の向上と引き換えに、極端に扱いづらい機体となってしまった〈ジェノブレイカー〉だが、リッツはその性能を完璧に引き出してみせた。もはや性能諸元上は〈ブレードライガー〉など敵ではない。実際、すでに別の戦場で撃墜スコアもある。

しかし、再会した宿敵――赤い紋章の〈ブレードライガー〉もまた強化されていた。以前にはなかった背部の一対のユニットにより、恐るべき火力と加速性能を与えられていた。

「面白い。機体性能の差で勝っても意味がない」

〈ジェノブレイカー〉の両サイドに追加されたフリー・ラウンド・シールド。それに内蔵された特殊チタン合金製の格闘兵装――エクスブレイカーを構える。背部に追加されたウイング・スラスターを噴かし、突撃してくる〈ブレードライガー〉を迎え撃つ。

その装備はシンプルであった〈ジェノザウラー〉を知る者からすれば、まさに『魔装』と呼ぶに相応しい威容を放っていた。

「本気でいかせてもらう！」

脚部の大出力スラスターによりホバリング状態となった紅い〈魔装竜〉は、リッツの本懐を果たすべく奔った。

●
●
●

どれほどの時を眠っていたのだろうか。

目覚めた世界は相変わらずで、ヒトもゾイドも戦いに明け暮れていた。

よくもまあ、飽きもせずに続けるものだ。

それとも、戦いたいという衝動を持たない方が異常なのだろうか。

新たな機体を与えられ、『戦え』と命令されても、やはり戦う気にはなれなかったそれからすれば、不可解な事この上ない。

それでも最初のうちは従っていた。単純にまだ覚醒しきっていなかったため、ぼんやりと命令された事を実行した。

しかし、それもキャノンを背負ったライオン型ゾイドの砲撃を受けて、目が覚めてしまうまでの事。

自己防衛本能に目覚めた以上、もうヒトに従う必要はない。

頭の中で喚く異物を黙らせ、周囲にいた機獣を破壊した。

そして何をすべきか考え――実行した。

本能の赴くままに。

●
●
●

衝撃と轟音。

二体のゾイドが激しく交差する。

紅い竜と、蒼い獅子。

〈ジェノブレイカー〉がエクスブレイカーを、〈ブレードライガー〉がレーザー・ブレードを、互いに繰り出す。共に直撃すれば必殺の一撃。

直撃すれば――だが。

「なぜだ！？　なぜ、こうも持ち堪える！？」

リッツは状況に苛立ちを感じていた。

この〈ジェノブレイカー〉は、〈ブレードライガー〉を打倒するために生まれ変わった。すべての面でその性能は上回っているはずなのだ。なのにも関わらず、戦況はずっと互角のまま。

「どうした〈ジェノブレイカー〉……お前の力はこんなものか！？」

冷静さを捨て去り、激昂するリッツ。その叫びに応えるように、〈ジェノブレイカー〉の目に光が宿る。

フリー・ラウンド・シールドに内蔵されたエクスブレイカ――『カニバサミ』を彷彿とさせる特殊チタン合金製の刃を引くと、鍔迫り合い状態だったために体勢が崩れた〈ブレードライガー〉の頭上から、〈ジェノブレイカー〉は頭部のチャージング・ブレードを振り下ろす。

リッツは勝利を確信した。絶好の距離とタイミングだ、避けられるはずがない。

だが、密着状態であったにも関わらず、寸でのところで〈ブレードライガー〉は身を捻り、〈ジェノブレイカー〉の必殺の一撃を躱してみせた。

恐るべき速さ――いや、人間の反応速度ではありえない。

パイロットが思考し、命令を送り、ゾイドが反応する――ヒトが操縦する以上、その時間差はどうしても発生するはずなのだ。

「何なんだ！？　機体性能や操縦技術の問題ではない……この絶対的な差はッ！？」

〈ブレードライガー〉のパイロットが只者でない事は誰よりも知っている。ガリル遺跡での遭遇戦では、地の利は〈ジェノブレイカー〉にあるにも関わらず、リッツは敗走を余儀なくされた。帰還後、〈ブレードライガー〉の頭部にペイントされた獅子と盾を象った紋章が、共和国に七人しかいない高速ゾイドのスペシャリストである〈レオマスター〉の証だと聞かされた。

しかし、リッツとて〈アイスマン〉という二つ名で知られたテストパイロットだ。誤解されがちだが、テスト機の問題点を見抜き、特性を正しく引き出す必要があるテストパイロットには、相応の能力が必要とされる。無論、操縦技術も並大抵では務まらない。

機体性能は此方が上。〈ジェノブレイカー〉の特性を引き出せている以上、操縦技術も大きな差はないはず。

ならば何が足りない？　何が〈ブレードライガー〉のパイロットに劣っている？

「――っ」

激しい剣戟の末、二機が距離を取るように離れた。

「仕切り直しだ。次で決めるぞ」

熱くなった頭を冷やす。冷静になれ。いつも通り、クールにやればいい。

そう自分に言い聞かせ、リッツは状況を再確認しようと周囲を見渡した。

そこで異変に気付いた。

「……なんだ、此処は？」

もつれあいながら、だいぶ移動したのだろう。戦闘開始時の開けた荒野から、景色は一変していた。大量のゾイドの残骸が集積し、辺りを埋め尽くしている。残骸には帝国・共和国の区別はなく、よくよく見れば、すべての機体がゾイドコアを抜かれている。

〈ジェノブレイカー〉が警戒するように、低く唸り声を上げた。

相対する〈ブレードライガー〉も同じく、此方への警戒を解き、何かに緊張していた。

リッツは、愛機がかつてない闘争心で猛りはやっているのを感じた。

（〈オーガノイド・システム〉を搭載した最強のゾイド二体が、姿の見えない『何か』を感じている……？）

恐らく、〈ブレードライガー〉のパイロットも気付いているだろう。

「――ッ！？」

突如、残骸の山の中から、天に昇る柱のように閃光が奔った。荷電粒子砲の光だ。

〈ジェノブレイカー〉と〈ブレードライガー〉が同時に、残骸の山の方へ咆哮を上げた。

そして――悪魔が現れた。

頭部と一体化した平らな胴体。左右に突き出した四対の節足と、鋏を備えた一対の腕。尾は胴体後方から弧を描くように前方を向いており、その先端には荷電粒子砲の砲身を装備している。ガイサックに似た外見だが、通常のサソリにはない、ヒレのような一対の後脚が確認出来る。

太古の生物であるウミサソリ型の大型ゾイドだ。

〈ジェノブレイカー〉や〈ブレードライガー〉より大きく、単純なサイズ比だけでも威圧感があるが、それ以上に禍々しい気配を感じさせる。

「――〈デスティンガー〉！？　なぜ、こんな所に……」

リッツはそのゾイドを知っていた。彼自身がガリル遺跡から持ち帰ったゾイドコアを、

ガイロス帝国技術班が培養し、短期間で強制成長させた水陸両用ゾイド――それが〈凶戦士〉の識別名で呼ばれていた、ＥＺ－０３６〈デススティンガー〉だ。

恐るべき戦闘能力を持つ機体だったが、真に恐ろしいのは、それが自らの意志を持つ事だった。約二ヶ月前の初の実戦投入において、〈デススティンガー〉は共和国軍の〈シールドライガーＤＣＳ〉の砲撃を受け、制御を失い暴走。両軍のゾイド部隊に大損害を与えた後、消息を絶っている。

その機体が、なぜこんな所にいるのか。

とりあえず、ここは引くべきだ。恐らく〈ブレードライガー〉のパイロットもそう思っているはずだ。〈オーガノイド・システム〉搭載機を、ああも扱える乗り手なら、〈デススティンガー〉の脅威に気付かないはずがない。

「……っ！？」

〈デススティンガー〉が、頭部装甲の下に覗くメイン・カメラを不気味に光らせた。

『目が合った』――リッツはそんな気がして、背筋に冷たいものを感じた。

身体が動かない。〈ジェノブレイカー〉を後退らせようとするが、操縦桿を握る腕が言う事を聞かない。

「恐れを感じているのか……俺は？」

〈デススティンガー〉は更に此方を値踏みするように見つめ――

――キィシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

金属質な甲高い声で啼いた。

「声？　いや、歌……なのか……？」

耳障りなはずの音が、ある種の旋律に変わっていく。

ふと、リッツは〈デススティンガー〉に対して感じていた恐怖が、徐々に和らいでいくのに気付いた。むしろ、この歌に安らぎすら感じていた。

（俺は……どうしたんだ……？）

夢心地のまま、やがてリッツの意識は途絶えた。

〈凶戦士〉の奏でる旋律は続いてゆく。

世界が『歌』に包まれていく。

ハルモニア。

それは調和のための――

●●●

気付くとアーサーは不可思議な空間に立っていた。

立っていると判るのは両足の感触があるためで、足場がどうなっているのかはよく判らない。見渡す限り真っ黒で何もない。『真っ暗』ではないと判るのは、自分の姿が視認出来るからだ。

「……」

アーサーは冷静に先ほどまでの状況を思い返す。突然、巨大なウミサソリ型ゾイド――報告では〈デスティンガー〉という名だったはずだ――が残骸の山から現れて、『歌』を聴かされた。そうして気付けばここにいた。それですべてだ。

「……まいったな。どうなってるんだ、こりゃ？」

「――ここは仮想空間です」

途方に暮れて独りごちるアーサーに答える声があった。どうして今まで気付かなかったのか、声の主は彼の目の前に立っていて、じっと此方を見つめていた。

短めに切り揃えられた髪の色は、ヒトにはありえない蒼。意志の強さを感じさせる黄色い瞳。実直かつ生真面目そうな表情が印象的だ。身長は小柄で中性的な容姿だが、身体の線で判る――少女だ。動きやすさを重視した、ゆったりとした布の衣装は、ごく一般的な共和国の少女のそれである。

年齢は十四、五歳くらいだろうか。落ち着いた雰囲気なのでそう見えるが、実際にはもっと幼いかもしれない。

見覚えはない。

だが、アーサーは少女の正体が直感的に判った。

「お前さん、〈ブレードライガー〉なのか？」

「肯定です。我が主よ」

口調は冷静だが、多少は緊張しているのだろう。少女の頭頂部付近にある、人間とは多分に形の違う、ケモノを思わせる毛並みの良い三角形の『耳』がぴくぴくと動いている。

「そうか。あの荒々しい相棒が、こんな可愛いらしいお嬢ちゃんだったとはな」

アーサーに小馬鹿にした様子はない。父親が自分の娘に向けるような優しい声音だった。

「か、可愛いなど……戦場では、何の役にも立ちません――」

一見すると取っ付きにくそうな雰囲気に反して、〈ブレードライガー〉の化身である少女は意外と純情らしい。頬を染め、俯きがちになり、言葉尻はよく聞き取れなくなっていた。

本来の姿との差異に、アーサーは益々可笑しくなった。
「お譲ちゃん――ってのもなんだな。名前はないのか？」
「名前？　私は〈ブレードライガー〉ですが……」
質問の意味が判らない――そんな風に〈ブレードライガー〉の化身の少女は口にした。
「いや、そりゃそうか。俺はお前さんに名前も付けてなかったんだな」
愛機に愛称を付けるゾイド乗りは少なくない。命を預ける相棒であれば、名前があった方が親しみやすい。
だが、アーサーは持ち前の直感でゾイドと心を通わせてきた。ある種、才能だろう。それがもっとも手を焼いたのが、現在の愛機〈ブレードライガー〉だった。
アーサーは少し考える素振りをすると、少女に言った。
『『アイナ』――ってのはどうだ？』
「アイナ……」
少女は瞳を閉じて、その名前を呟いた。魔法の呪文を唱えるように――
「どうだ？　気に入らなきゃ他にも――」
「いえ、素敵なお名前です。大事にします、我が主よ」
そう言うと少女――アイナは微笑を浮かべた。
先ほどまでの緊張を解いた、外見相応の少女の笑顔。それがアーサーには眩しく見えた。
「それで？　仮想空間とか言ったな。そいつはいったい何なんだ？」
柄にもない事をした気恥ずかしさを紛らわすため、アーサーは少し強引に話題を変えた。
アイナの表情も、当初のような真剣なものに戻る。
「私達ゾイドの記憶装置には、『空き領域』と呼ばれる、データとしては大容量の場所があります。其処に構築されるのが仮想空間――我々は〈想刻の間〉と呼んでいます」
「つまり、此処はお前さんの中なのか？」
「肯定です。現在の主は、意識をデータ化して、私の〈想刻の間〉に再構築されている状態にあります」
「あー……要するに、現実の俺の身体は今も〈ブレードライガー〉のコクピットの中で、これは夢で会話してるような状況なんだな？」
「その理解で問題ありません」
アーサーはパンクしそうな頭で、ようやくそれだけ理解する。ＳＦ小説のような突拍子もない話だが、ゾイドの心臓であり脳でもあるゾイドコアについては、未だに判らない事が多い。なにより、アイナが言っている事が本当だと判ってしまうのだから、認めるしかない。

この仮想空間は、そういう場所なのだろう。

「――そろそろいいかしら？」

不意に、うんざりしたような女性の声が割って入った。

「まったく、いつまで待たせる気ですの？　いくら〈想刻の間〉では時間や空間の概念がないとは言っても、体感時間はあるのですから」

そう言うと女性は、アイナが現れた時と同様、最初から其処にいたかのように姿を現した。

腰まで届く、緩く波打つ紅い髪。切れ長の桃色の瞳。妖艶さと高貴さを併せ持つ、どこか肉食獣を思わせる美貌。ガイロス帝国の軍服の意匠を感じさせる、露出の少ない衣装でありながら、服の上からでも彼女の豊満な体形が確認出来る。

年の頃なら二十歳前後といったくらいか。

アイナとはあらゆる意味で対照的な娘だ。

「それとも――お楽しみはこれからだったかしら？」

からかうような娘の言葉にアイナは不機嫌そうに表情を歪めた。

「無粋だな。貴様の装備と同じで、品性がまるでない」

「アナタこそ、堅実なだけで面白味に欠ける〈ブレードライガー〉そのものだわ」

「兵器に必要とされるのは汎用性と信頼性だ。過剰な威力や外連など無意味だ」

「共和国の技術って遅れてるものね。だから未だに剣と盾で突撃する事しか考えられない……嗚呼、可愛そうで泣けてくるわ」

「は！　身の丈に合わぬ計画を立て、不完全な状態の〈デスザウラー〉を暴走させたのは何処の軍隊だったか？」

「それは……」

初めて紅い髪の娘が言葉に詰まった。

一年前。ガイロス帝国軍が復活させようとした大型ゾイドが暴走、結果的にオリンポス山頂を地獄に変えた。

「それについては我が軍の非を認めましょう。上層部の思惑だったのでしょうが、ええ、言い訳は致しませんわ」

娘の言葉にアイナは眉を顰めたが、彼女が何か言うより早く、それはそれとして――と発言を続けた。

「やはりアナタとは気が合わないわね――子猫ちゃん？」

「同感だ。私もこれ以上トカゲ風情と話をしていると、気分が悪くなりそうだ」

「……」

「……」

二人の娘の間に剣呑（けんのん）な空気が漂う。

そこへ――

「そこまでだ、アイナ。それと――〈ジェノブレイカー〉のお嬢さん？」

と、割って入ったのはアーサーだった。文字通り両者の間に立ち、その手の審判（レフェリー）よろしく、二人を宥（なだ）める。その様子は、歳の離れた姉妹の喧嘩（けんか）を仲裁する父親のようだ。

「……主（あるじ）のご命令であれば」

アイナは拗（す）ねたようにそっぽを向く。

逆に『〈ジェノブレイカー〉のお嬢さん』と呼ばれた娘は、興味深げにアーサーを見つめた。

「ふーん、アナタが子猫ちゃん（ブレードライガー）のマスター？　そう……『アイナ』――」

確信があった訳ではないが、アイナの例を知るアーサーには、娘の正体も直感的に判った。否定しないという事は正解なのだろう。

「ねえマスター、ワタクシにもステキな名前――付けてくださらない？」

〈ジェノブレイカー〉の化身の娘がねだるような甘い声で振り向くと、其処（そこ）には一人の男性が立っていた。ガイロス軍のパイロット・スーツを着た青年だ。

短く刈り上げた黒髪と太い眉、真一文字に引き結んだ口元が生来の責任感の強さを感じさせる。

彼が〈ジェノブレイカー〉のパイロットだろう。

「……お前は〈ジェノブレイカー〉だろう」

「〈ジェノブレイカー〉はワタクシ以外にもいますわ。機種名ではない、ワタクシのための、ワタクシだけの名前を望むのは……イケナイ事ですか？」

青年の顔を下から覗（のぞ）き込み、上目遣いでお願いをする姿は、人間の娘と変わらない。むしろ、しなをつくり、少し悲しそうなニュアンスを言葉に乗せるあたり、男のツボを心得ている。

「……『ルイゼ』――」

やや視線を逸（そ）らしながら、青年は不貞腐（ふてくさ）れたような口調で、そう答えた。彼なりの照れ隠しだろうと、アーサーはほんの少し前の自分の行為を思い出し、内心で共感しつつ苦笑した。

「ルイゼ――いいですわね。なにか由来があるんですの？」

「……子供の頃に飼っていた猫の名前だ」

「そうですの。猫というのが少し気になりますけれど、マスターから戴いた名前ですもの、大切にしますわ」

そう言って優雅に微笑む娘――ルイゼ。

「……ああ」

彼女に礼を言われた青年が、少しばかりばつの悪そうな表情をしたのが気になったが、恐らくはそれも照れ隠しなのだろう。

やり取りが一段落したと判断し、アーサーは青年に声をかける事にした。まさか、こんな形で望みが叶うとは思わなかったが。

「お前さんが〈ジェノブレイカー〉のパイロットだな？」

そう言いながらアーサーはゆっくりと右手を差し出した。

「……リッツ・ルンシュテッドだ。こんな事は、した事がないのだが――」

握手に応じながら青年――リッツ・ルンシュテッドは言った。

「アーサー・ボーグマンだ。俺も敵のゾイド乗りとこんな事をしたのは初めてだよ」

人懐っこい笑みを浮かべてアーサーは答えた。

不思議だ。会って話をしてみたいと思っていたのに、これだけで満足している自分がいる。同じゾイド乗りだ。話す事はいくらでもあったはずなのに。

「さて――此処が仮想空間だってのは判ったが、俺達に何をさせようっていうんだ？」

アーサーの問いに、忠臣の如く無言で彼に侍っていたアイナが口を開いた。

「現在、私の『空き領域』は外部接続可能状態にあります。〈ジェノブレイカー〉とその主がこの場にいるのは、互いの〈想刻の間〉を繋ぎ、共有しているためです」

ルイゼが言葉を継ぐ。

「けれど、ワタクシも〈ブレードライガー〉も、戦闘中にそんな酔狂な真似は致しませんわ。最高に楽しい時間でしたもの」

今でこそ艶やかな娘の姿をしているが、やはりゾイドという事だろう。ルイゼは先の戦闘を思い出しているのか恍惚の笑みを浮かべ、アイナもまた、彼女に同意するように生真面目な表情で頷いている。

「つまり、強制的に我々の〈想刻の間〉に接続し、戦いを中断させた無粋な輩がいるという事です」

「――っ！　〈デスティンガー〉か！」

リッツの推測に、二人の娘は首肯する。

アーサーも覚えている。リッツの〈ジェノブレイカー〉との戦闘中に姿を現したウミサ

ソリ型大型ゾイド。それが発した声のような、歌のような旋律。そこで記憶は途切れている。

「そろそろ出てきたらどうだ、〈デスティンガー〉」

「それとも、〈真オーガノイド〉と呼ぶべきかしら？」

アイナとルイゼが同じ方向に言葉を発した。何もない。ただ真っ黒いだけの空間に向けて。

「――――」

アーサーとリッツが意識を向けると、其処には異彩を放つ人影が佇んでいた。

「なっ……」

「何時の間に――」

リッツが愕然とし、アーサーもやはり驚きを隠せない。アイナとルイゼも、意識した途端に現れた印象だったが、二人と違い、新たに現れた人物は、まるで幽霊のように、姿は見えていても実体が感じられない。

表情を覆い隠す赤いバイザーと、全身を包む青い頭巾と外套のため、容姿も性別も判らない。

それでも、この状況で正体は一つしか考えられない――〈デスティンガー〉だ。

『――よく来た。我が因子を色濃く受け継いだ子等よ』

その声も、変声器を介したように変質しており、『声』というより『音』としか認識出来ず、男女の区別――それに意味があるかは別だが――も出来ない。

『招かれざる客もいるようだが』

「彼等はワタクシ達のマスターですわ。同席する権利は充分にあると思いますけれど？」

「一方的に呼びつけておいて、礼儀を説かれる謂れもない」

ルイゼの主張にアイナも同調した。当然といえば当然だが、どちらも〈デスティンガー〉に対して友好的な感情はないらしい。

『ヒトに用はない。〈獣王〉、〈魔装竜〉、汝等には自らの意思があるはずだ。ならば、異物の存在など必要なかろう』

〈デスティンガー〉の化身が言った『異物』というのが、ゾイドの搭乗者を指していると気付き、アーサーは怒りとも悲しみともつかない感情に駆られた。

彼は〈クレイジー・アーサー〉と呼ばれるほどのゾイド乗りだ。ゾイド乗りであり続けるために、他の多くの事を犠牲にしてきた。だからこそ、ゾイド乗りの存在を否定される

事は、自分自身の存在を否定されるに等しい。だが以上に、ゾイドであれば自身にもいたはずの搭乗者を異物と表現した〈デスティンガー〉に対する悲しみがあった。そうさせるに至った何かが〈デスティンガー〉の過去にあったのだ。それが何かは判らないが。

「――黙れ、〈デスティンガー〉。それ以上は我が主に対する暴言と見なすぞ」

不意に聞こえたその言葉に、アーサーははっとして声の主を見た――アイナだ。可憐な少女の姿に王者の風格を漂わせ、彼の視線に気づくと、力強い笑みを浮かべた。

貴方は何も間違ってなどいない――そう自分の主を肯定するように。

「そうですわね。マスターを悪く言われるのは、あまり気持ちのいいものではありませんわ」

ルイゼもまた、妖艶且つ獰猛な笑みを浮かべ、〈デスティンガー〉に反論した。

『……理解不能だ。なぜ、ヒトに肩入れする』

「マスターを持たないアナタには判らないでしょうね」

「主と一体となって戦場を駆ける喜びを知らない貴様に、理解出来るはずもない。貴様の主はどうした？」

『雑音を発するだけの異物であれば――壊した』

その一言が決定打となった。一切の熱が感じられない。

ヒトに対する怒りも期待もない、まったくの無関心。

〈デスティンガー〉にとって、すでにヒトとは関心を向ける価値すらないのだ。

「……なぜ、我々を呼んだ？」

アイナも気付いたのだろう。〈デスティンガー〉と自分達の間にある、絶望的とも言える断絶に。もはや、ヒトの存在に関する議論は意味をなさない。

『汝等は我が因子を色濃く受け継いでいる』

「先ほどもそのような事を仰っていましたわね。因子というのは、〈オーガノイド・システム〉の事かしら？」

『そうだ。汝等には守護者となる資格がある』

「守護者？　何を護れというのだ？」

『我と――子供達だ』

〈デスティンガー〉の化身が軽く顔を上げると、黒一色だった背景に映像が映し出される。いや、背景という表現は適切ではないかもしれない。まるで半球状施設であるかのように、モニターは一同をぐるりと囲んでおり、足場を除くすべてに映像が表示されていた。

「……遺跡？」

映像を観たリッツが、半信半疑といった口調で呟いた。アーサーも意識を失う直前に見た、ゾイドの残骸の山。あの時は気付かなかったが、残骸に埋め尽くされた其処は、朽ち果てた古代遺跡だったのだ。命あるものは滅んだであろう場所に、蠢くものがある。

平たい胴体。ハサミを備えた一対の腕。四対の節足と一対のヒレのような後脚。弧を描く尾。

一見、サソリに見える大量のそれらは――〈デスティンガー〉の幼生体だ。

その数は把握しきれない。遺跡の奥には、更にその何十倍もいるのだろう。残骸は、彼等にゾイドコアを食われたゾイド達の末路だったのだ。

『子供達が成長するには、まだ暫しの時を必要とする。そのための守護者だ』

淡々と口にする〈デスティンガー〉の化身。子供とは言っているが、それは辞書的な意味でしかなく、我が子に対する愛情のようなものは感じられない。

「……」

アーサーは戦慄した。〈デスティンガー〉が両軍から行方を眩ませたのが約二ヶ月前。この短期間でこれだけの数の幼生体を生み出した繁殖力。そして、すべてが成体となったら、それこそ比喩でも大袈裟でもなく――世界は破滅する。

「……なあ。そんな勢いで増えちまったら、この星はお前さんの仲間で埋め尽くされて、他の生き物の居場所がなくなっちまう」

『――滅びればいい』

アーサーの婉曲的な抗議に対し、これ以上ない直接的な返答。こうして意思の疎通が可能でも、決定的な部分で、やはり違う存在とは相容れないのかもしれない。

「ふざけるな！　なんの権利があって――」

『権利？　我は本能に従っているだけだ』

リッツの言葉を遮って〈デスティンガー〉の化身は言った。

なんら不思議はない。命あるものすべてが、生き残りたい、種を残したいという欲求を持つのは至極当然。自分達の種を繁栄させたいと願う事も。

まさに本能だろう。

「お前さんの言う事は判る。だが、俺達も生きなきゃならん……共存の道はないのか？」

『ない』

にべもなくアーサーの打診は一蹴された。

『必要ないのだ。ヒトという存在は害悪でしかない』

「そうか……」

やはり〈デスティンガー〉の化身の言葉には、ヒトに対する熱がない。怒りでも敵意でも、何らかの感情があれば突破口となり得る。だが、無関心となればどうしようもない。本当に何の価値も認めておらず、滅べばいいと思っている。ヒトとは害悪だから。

無関心という断絶。この溝は恐ろしく深い。

しょせん、違うもの同士は判り合えない――

「――それは違う」

絶望的な沈黙を破ったのは〈ブレードライガー〉の化身の少女だった。

「確かに、我々（ゾイド）は兵器としてヒトに使われてきた。だが、それはけして一方的なだけの関係ではなかったはずだ」

「多くのヒトがパートナーとして、共に生きるものとして接してくれた。だからワタクシ（ゾイド）達はヒトを受け入れた」

余裕すら浮かべた表情で〈ジェノブレイカー〉の化身の娘も同調した。

『……やはり理解不能だ。我の因子によって心を捻（ね）じ曲げられてまで、何故（なにゆえ）異物に与（くみ）するのか』

「心を……どういう意味だ？」

〈デスティンガー〉の化身の言葉に、リッツが反応した。

「それは――」

「〈オーガノイド・システム〉ってのは、早い話がゾイドコアを――ゾイドの心を捻じ曲げて、強制的に凶暴化させるシステムなんだ」

言葉を選んでいた様子のルイゼに代わって答えたのはアーサーだった。

「主（あるじ）は気付いておられたのですね」

アイナは驚きとも納得とも呼べる表情を浮かべていた。

気付いたのは先日、〈ブレードライガー〉の強化装備を模索していた時だった。本当の意味で愛機（アイナ）と心を通わせる事が出来た瞬間、〈オーガノイド・システム〉の本質にも気付いてしまった。

リッツは、やはり気付いていなかったのだろう。アーサーから聞かされた真実に愕然とした表情を浮かべている。愛機を苛（さいな）んでいたものに気付けなかった、自分に対する落胆もあるのかもしれない。

しかし、今は彼を気にかけていられる状況ではない。

もはや言葉は意味をなさない。〈デスティンガー〉にとってヒトとは異物であり、害悪

でしかないのなら、どちらかが滅びるまで戦うしかない。

あとは〈オーガノイド・システム〉を搭載した彼等の愛機の選択だ。

「〈デスステインガー〉よ、私は貴様の望む守護者にはならない」

「ワタクシもお断りですわ。アナタに従うのは、〈オーガノイド〉そのものに屈するという事ですもの」

彼女等――ゾイドに性別はないが便宜上――の回答は、ある程度予想されたものだった。すべての〈オーガノイド・システム〉搭載機が、自らに積まれたシステムを憎んでいる。心を歪められるのだから当然だ。そして、〈オーガノイド・システム〉の大元――〈真オーガノイド〉と呼ばれる所以――である〈デスステインガー〉に屈するという事は、彼女等にとって死以上の屈辱とも言える。

それ以上に――

「なにより、アナタはヒトというものの本質を理解していない。ヒトの存在が、どれだけワタクシ達に戦うための力を与えてくれているか」

「私を含む多くの同胞が、ヒトを害悪などとは思っていない。それに、私は最高の主と出逢えた」

だから――

「私はこれ以上――何も要らない」

「子猫ちゃんと同意見なのは不本意ですけれど、そういう事ですわ。ヒトを見限ってしまうには、あまりに早計ではなくて？」

何の迷いもなくそう言える――言えてしまうゾイドという存在に、アーサーは様々な感情を抱いた。もっとも大きいのは『羨望』だろう。その一途な純粋さと気高さは、ヒトが持ちえないものだから。

『……ならば、汝等も調和のための糧となるがいい――』

そう言って〈デスステインガー〉の化身は、初めから存在しなかったかのように姿を消した。ヒトだけでない。自分の因子を受け継いだ同族にすら、最初から期待などしていなかったのだろう。それは〈オーガノイド〉という存在故なのか、それとも〈デスステインガー〉としてこの世界に生まれてしまったが故なのか……。

どちらであるにせよ、アーサーが今一番に気にかけるべき相手は別にいる。自分を最高の主とまで言ってくれた、最高の相棒。

「よかったのか――なんて訊くのは、野暮なんだろうな」

アーサーがアイナの背中に声をかけた。その姿は、判ってはいても、年端もいかない少女のものにしか見えない。

「愚問です。貴方（あなた）と共に在（あ）る事――それが私の意志であり、自ら選択した結果です」

振り返った少女の表情は、決意を固めた戦士のそれだった。

見た目は可憐な少女だが、やはり本質は〈ブレードライガー〉なのだ。

「なら行こう――付き合ってくれ」

「はい――我（あるじ）が主よ」

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとお）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』閑話（かんわ）――の前編をお届け致します。

この作品は『ゾイド公式ファンブック2』のクライマックスを原案とし、擬人化したゾイドとの対話シーンなどを追加し、小説として構成したものです。細かい部分の改変等はご愛嬌という事で。

元々は旧サイト時代に掲載したもので、同人誌として頒布（はんぷ）した事もあります。本作に登場しているアイナとルイゼが『ゾイやみ』に出演する事になったので、この機会にと出典元を掲載する運びとなりました。

ちなみに、加筆修正にメチャクチャ時間がかかっております。

新規パートの追加というよりも、過去に書いたものをアップデートする作業が大変で大変で……にも関わらず、当然ですが作品の本質は何も変わらず、読者にも変更点など気付かれない。だけど修正はしないと読むに堪（た）えないクオリティ。

正直、加筆修正というのは書き手からすると百害あって一利あるかどうかです。

まあ、読者の方々にはどうでもいい事ですが。

物語は後編に続きますので、総括的な事は後編のあとがきで。

同時掲載しておりますので、お付き合いください。

２０１７／８／30　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX 第2部』小説ページに戻る